375.9
Mo14
資料室

小學國語讀本

尋常科用

卷四

文部省

41392
教科書文庫
4
8/0
31-1938
~~2000.0~~
~~2278~~
200030
2736

小學國語讀本

尋常科用

卷四

文部省

資料室

375.9
M014

もくろく

一　富士の山……一
二　早鳥……四
三　海軍のにいさん……十二
四　カケッコ……二十一
五　かぐやひめ……二十六
六　たぬきの腹つゞみ……三十八
七　月と雲……四十
八　ヲヂサンノウチ……四十七
九　山がら……五十二
十　山がらの思出……五十四
十一　大江山……五十六
十二　鬼ごっこ……七十二
十三　いうびん……七十五
十四　ニイサンノ入營……八十四
十五　すゞめ……九十
十六　白兎……九十二
十七　豆まき……百一
十八　百合若……百七
十九　ひなまつり……百十二
二十　北風ト南風……百十四
二十一　羽衣……百三十

廣島大學圖書之印
廣島大學圖書之印
廣島大學教 22283 圖書

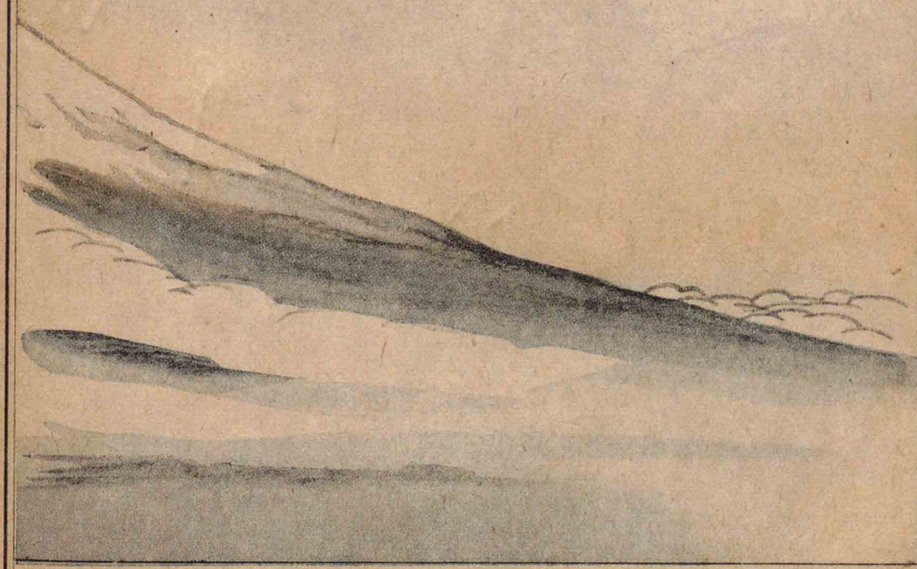
廣島大學圖書之印

一　富士（ふじ）の山

あたまを
雲の上に出し、
四方の山を
見おろして、
かみなりさまを
下に聞く、

富士は
日本一の山。

青空高く
そびえ立ち、
からだに
雪の



着物
着て、
かすみの
すそを
遠くひく、
富士は
日本一の山。

鳥

昔

二 早鳥

昔、ある所に一本のくすの木がありました。どんな力が、この木にあったのでせう、ひるも夜も、ぐんぐんとのびて行きました。いつの間にか、くすの木は、その高いこずゑに、時々雲がかゝるほど になりました。

枝

四方にひろがって、どこまでつゞいてゐるのか、見きはめもつかないやうになりました。

方

毎朝、日が出ても、くすの木の西がはにあるたくさんの村々は、みんな日かげになります。また夕方近くなると、東の方の村々も、すっかり日かげになってしまひます。そこで、村々の人たちがさうだんして、「あのくすの木を切りたふしてしまはう。」といふことになりました。

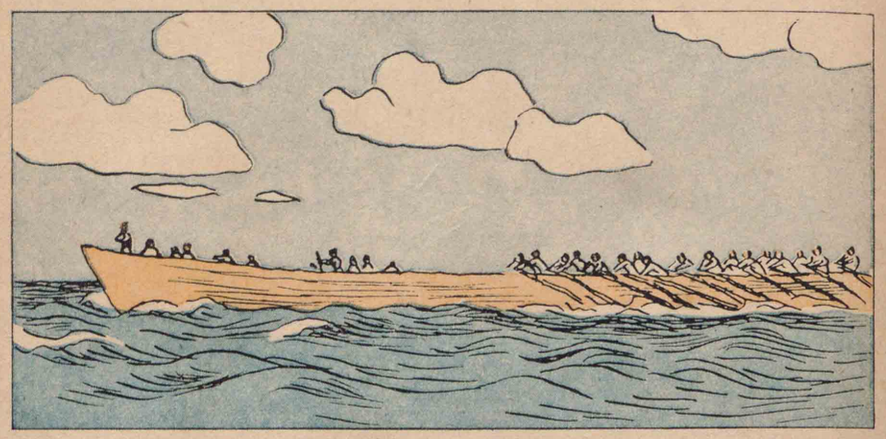
こんな大きな木のことですから、切るのも大へんでした。何十人、何百人のきこりが集って、毎日毎日大さわぎをして、やっと切りたふしました。今度は、切りたふした木を、どうしたらよいかといふことになりました。すると、あるちゑのあるおぢいさんがいひました。

「この木をくりぬいて、舟を作ったらどうだらう。」

「なるほど、よいかんがへだ。」

と、みんながいひました。

そこで、大ぜいのだいくを集めて、舟を作りにかゝりました。さうして、長い間かゝって、とうく一さうの舟を作り上げました。



いよく海にうかべてみますと、今まで見たことも、聞いたこともない、大きな舟でした。さうして、大ぜいのせんどうがのりこんで、「えいや、えいや。」とこぎましたが、おどろいたのは、そ

波

の舟の早いことでした。せんどうたちが、かいをそろへて一かき水をかきますと、舟は七つの大波をのり切って、まるで鳥のとぶやうに早く走るのでした。

見てゐた人たちは、

「何といふ早い舟だらう。」

「ふしぎな舟だ。」

といひました。すると、あのちゑのあるおぢいさんが、

「いや、ふしぎでも何でもない。あのぐんぐんとのびて行ったくすの木だ。その力がのりうつったのだらう。鳥のやうに早いから、早鳥といふ名をつけよう。」

といひました。

麥 豆 通 困 海軍

そののち、早鳥は、たくさんの米や麥や豆やくだものをつんで、みやこの方へたびたび通ひました。日かげになって困ってゐた村々も、それからだんだんゆたかになって行ったといふことです。

三 海軍のにいさん

畠

ぼくがべんきょうしてゐると、くつの音がして、だれかうちへはいって來ました。出て見ると、海軍のにいさんでした。

にいさんは、にこにこしながらざしきへ上って、おとうさんにごあいさつをしました。うらの畠にゐたおかあさんも、かけて來て、あたまから手ぬぐ

黒

ひを取りながら、
「あゝ、よくかへって來たね。」
と、うれしさうにおっしゃいました。
にいさんは、前よりもずっと色が
黒くなって、強さうに見えました。
おかあさんが、お茶をいれて、
「ほんたうにしばらくだったね。まあ、
一つおあがり。」

勇

とおっしゃいました。にいさんは、おいしさ
うにのみました。ぼくはうれしくて、
そのまはりをとび歩きました。
にいさんは、
「勇、大きくなったね。いゝ子になった。」
といひました。
「ぼくも、大きくなったら海軍だよ、
にいさん。」

といふと、

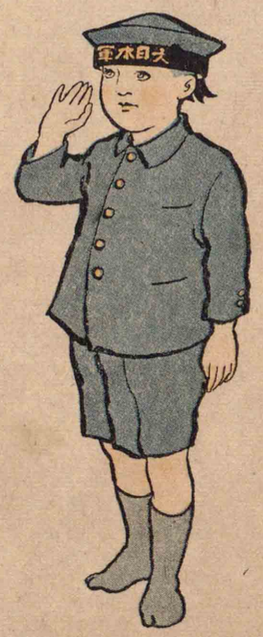
「さうだ、海軍がいゝ。大ぢゃうぶなれるよ。」

と、にいさんは、ぼくのあたまをなでてくれました。

ぼくは、うれしくてたまりません。にいさんのぼうしをかぶると、おとうさんが、

字書　讀

「かはいらしい海軍だな。ぼうしのおばけのやうだ。」

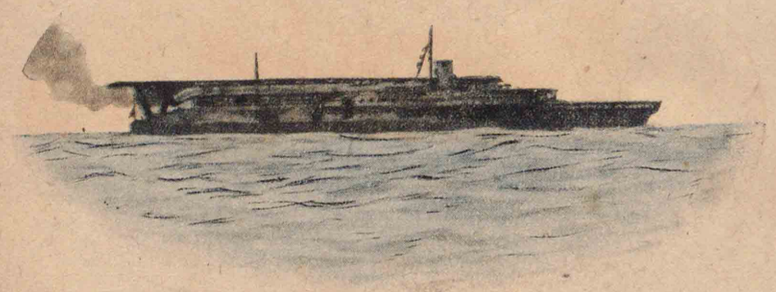


といって、おわらひになりました。ぼうしには、金で字が書いてありました。

「大日本、軍、それから何と讀むの。」

と　聞きます　と、にいさん　は、
「だいにっぽん　ぐんかん　かが。」
と　をしへて　くれました。
おふろ　に　はいって　から、みんな　一しょ
に　ごはん　を　いただきました。
にいさん　は、ごはん　を　たべながら　も、
しじゅう　にこ〳〵　して　ゐました。さうして、
軍かん　や　ひかうき　の　おもしろい　話

加賀



を、いろ〳〵　と　して　くれました。にいさ
んの　のって　ゐる　加賀
は、たくさん　の　ひかう
き　が　のせて　あって、
それ　が、ひろい　かんぱ
んの　上　から、じいう
に　とんで　行く　のだ
さう　です。

「軍かん と いっても、加賀 などは、動く ひかうぢゃうの やうな ものです ね。」

と いって、にいさん は わらひました。おとうさん は、「ほう、ほう。」と いひながら、かんしん して 聞いて いらっしゃいました。ねる 時 には、ぼく は にいさん と ならんで ねました。

旗

並

四 カケッコ

一年生ノ旗取ガスンデ、イヨ〳〵ボクタチ二年生ノカケッコニナリマシタ。ボクハ、ムネガドキ〳〵シテ來マシタ。

ボクタチ七人ハ、出發線(シュッパツセン)ニ並ビマシタ。

「ヨウイ。」

先

負

ト 先生 ノ コエ。

「ドン。」

聞ク ガ 早イ カ、カケ出シマシタ。

ソノウチ ニ、二人 ガ、ボク ノ 前 ヘ

ヌイテ 出マシタ。

「負ケル モノ カ。」

ボク ハ、一生ケンメイ ニ 走リマシタ。

「シッカリ。」

「早ク、早ク。」

オウエン ノ コエ モ、ゴチャゴチャ ニ ナッテ 聞エマス。

モウ 何 モ 見エマセン。ボク ハ、ムチュウデ 走リマシタ。スルト、何カ ニ ツマヅイテ、ヒドク コロビマシタ。

「シマッタ。」

ト 思ヒナガラ、スグ ハネオキマシタ。ガ、

モウ ミンナ カラ、スッカリ オクレテ シ
マヒマシタ。
「ヨサウ カ」。
ト 思ヒマシタ。シカシ、オトウサン ガ、
「負ケテ モ ヨイ カラ、シマヒ マデ 走
ル モノ ダ」。
ト オッシャッタ ノ ヲ 思ヒ出シテ、マタ
一生ケンメイ ニ 走リマシタ。

「ワア」。
ト、手 ヲ タ、イテ、笑ッテ キル モノ モ
アル ヤウ デシタ。
キマリ ガ ワルイ ト
思ヒナガラ、ボク
ハ 決勝線(ケッショウセン) マ
デ 走リマシタ。
スルト、先生 ガ

ニコ〳〵 シテ、
「太郎君、エライゾ。コロンデ モ、ヨク
シマヒ マデ 走ッタ。カンシン、カンシン。」
ト イッテ、ホメテ 下サイマシタ。

五 かぐやひめ

竹取のおきな といふ おぢいさん が あ
りました。毎日 竹 を 切って 來て、ざる

や かご を こしらへて ゐました。
ある日 の こと、も
との 方 が 大そ
う 光って ゐる 竹
を、一本 見つけまし
た。それ を 切って、
わって 見ます と、中
に 小さな 女の子

金

が ゐました。おぢいさん は よろこんで、手のひら へ のせて かへりました。さうして、おばあさん と 二人 で そだてました。小さい ので、かご の 中 へ 入れて おきました。

この 子 を 見つけて から、おぢいさん の 切る 竹 から は、いつも お金 が 出て 來ました。それで、おぢいさん は だ

娘　世間

んだん お金持 に なりました。

この 子 は、ずんずん 大きく なって、三月 ほど たつ と、十五六 ぐらゐ の 美しい 娘 に なりました。おぢいさん は、この 子 に かぐやひめ と いふ 名 を つけました。

そのうち に、世間 の 人々 は、かぐやひめ の ことを 聞いて、「じぶん が むこ

申

に ならう」。「私 の よめ に 下さい」。と
申しこみましたが、かぐやひめ は どうしても しょうち しません。おぢいさん も、「じぶん の ほんたう の 子 で ない から、
私 の 思ふ やう には なりません」。と
いって ゐました。のち には、とのさま から、
おく方 に したい と の おことば も
ありました が、かぐやひめ は それ も

晩夜

おことわり いたしました。
かうして 何年 か たちました。ある年 の
春 の ころ から、かぐやひめ は、月 の
あかるい 晩 には、月 を ながめて 何
か かんがへて ゐる やう でした。八月
の 十五夜 近く なる と、こゑ を 立て
て 泣いて ばかり ゐました。おぢいさん
や おばあさん が、なぜ 泣く のかと

都　界　別

聞きます　と、かぐやひめ　は、
「私　は、もと　月　の　都　の　もの　で
ございます。長い　間　おせわ　に　なりま
した　が、この　十五夜　には、月　の　世
界　から　むかへ　に　まゐります　ので、
かへらなければ　なりません。みなさん　に
お別れ　する　の　が　つらくて、泣いて
ゐる　ので　ございます。」

と　いひました。おぢいさん　は　おどろいて、
「それ　は　大へん　だ。むかへ　に　来て
も、わたす　もの　か。」
と　いひました。
おぢいさん　は、何　と　か　して、かぐやひ
め　を　ひき止めたい　と　思ひました。さう
して、この　こと　を　とのさま　に　申し上
げます　と、とのさま　は、

兵　追　夜

「それ　では、その　晩　には、兵たい　を
たくさん　やって、月の　都　の　使　が
来たら、追ひかへして　しまはう。」
と　おっしゃいました。
いよ〳〵　十五夜　の　晩　に　なりました。
おぢいさん　の　家　の　まはり　は、兵たい
が　いくへ　にも　取りかこみました。
夜中ごろ　に　なると、急　に、お月さま

弓　矢

が　十　も　出た　か　と　思ふ　やう　に、
あたり　が　あかるく　なりました。
「さあ、来た　ぞ。」
と、兵たいたち　は、弓　に　矢　を　つがへ
よう　と　しました　が、目　が　くらんで、
どう　する　こと　も　出來ません。
その　時、たくさん　の　天人　が、雲　に
のって　下りて　来ました。かぐやひめ　も、

今は　し方　が　なく、
泣いて　ゐる　おぢいさん
んと　おばあさん　に
向かって、
「今　お別れ　申す　こと
と　は、まこと　に
かなしう　ございます
が、いたし方　が　あ

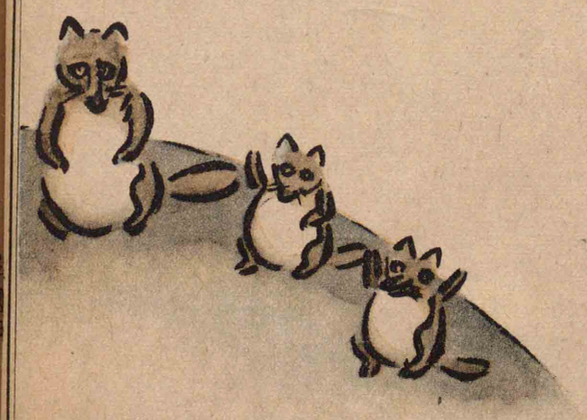
りません。月夜　の　晩　に
は、どうか、私　の　こと
を　思ひ出して　下さい。私
も、お二方　の　ごおんは、
けっして　忘れません。」
と　いって、天人　の　よう
して　來た　車　に　のって、空
へ　上って　行って　しまひました。

腹

親

六 たぬきの腹つゞみ

「さあ、さあ、集れ、月が出た。
みんなで、つゞみの
うちくらだ。」
お山の上では、
親だぬき、
ぽんぽこ、あひづの



木

腹つゞみ。
やぶのかげから、
木かげから、
ぬっくり、ぬっくり、
子だぬきが、
出て來てお山へ集って、
ずらりと並んでわになった。

圓

空には圓い　お月さま、
ぽっかり　うかんだ　白い　雲。
月に　うかれて、腹つゞみ、
ぽんぽこ、ぽんぽこ　うち出した。

七月と雲

月夜の晩でした。

止

ある所で、子どもたちが五六人集って、かげふみをしてあそんでゐました。そのうちに、月に雲がかゝりました。月は、雲にはいったかと思ふと、すぐ出、出たかと思ふと、すぐまたはいります。かうなっては、かげふみも出來ません。子どもたちはあそぶことを止めて、しばらく月を見てゐ

ました。

すると、一人の子どもがいひました。

「あれは、お月様が走ってゐるのだらうか、雲が走ってゐるのだらうか。」

月は、今雲から出て、大急ぎでは なれて行きます。さうして、次の雲の方へ、どんゝ走って行きます。

「お月様が走ってゐるのだよ。」と、一人の子どもがいひました。

しかし、じっと月を見つめてゐますと、月は動かないで、雲が大急ぎでと んで行くやうにも見えます。それで、

「お月様ではない。走ってゐるのは雲だ。」

といふ子どもありました。

始

それから しばらくは、「月が走る。」「雲が走る。」と、たがひにいひはってゐました。

みんながわいくいふのを、始からだまって聞いてゐた一人の子どもがありました。その子どもは、この時、みんなからはなれて、前の方にある木のそばへ行きました。さうして、

しばらく枝ごしに月を見てゐましたが、

「こゝへ來たまへ。雲が走るか、お月様が走るか、よくわかるよ。」

といひました。

みんな、木のそばへ來ました。

「こゝに立って、お月様を枝の間から見たまへ。」

と、その子どもがいひました。
その通りに、みんながしてみました。
すると、月は枝の間にじっとしてゐますが、雲はさっさと走って行きます。
「わかった、わかった。走ってゐるのは雲だ、雲だ。」
と、みんながいひました。

足

八　ヲヂサンノウチ

川一ツコエテ向カフノ村ニ、ヲヂサンノウチガアリマス。キノフ、私ハ、オカアサンノオ作リニナッタオハギヲ持ッテ、オ使ニ行キマシタ。
ヲヂサンノウチデハ、庭一パイモミガホシテアッテ、足ノフミバモナ

イクラ牛デシタ。ウチノ人ハミシナルスデ、オバアサンダケガ、日アタリノヨイエンガハデ、ツギ物ヲシテイラッシャイマシタ。

オバアサンハ耳ガ遠イノデ、私ガ大キナコエデ、

「オバアサン、今日ハ。」

トイフト、フリカヘッテ、

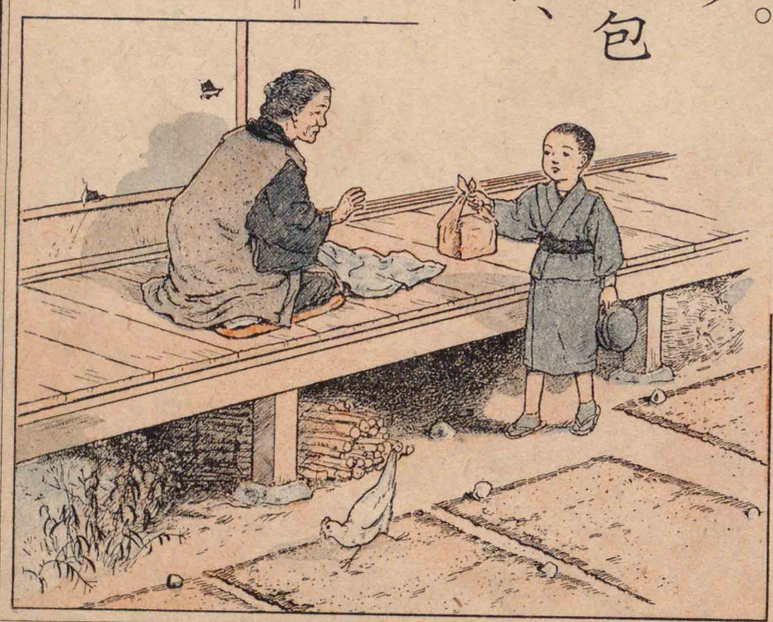
「オウ、正チャンカ。ヨク來タネ。」

トオッシャイマシタ。

私ガ、オハギノ包ヲ渡シスルト、オバアサンハ、

「ソレハアリガタウ。」

トイッテ、オ受取リ



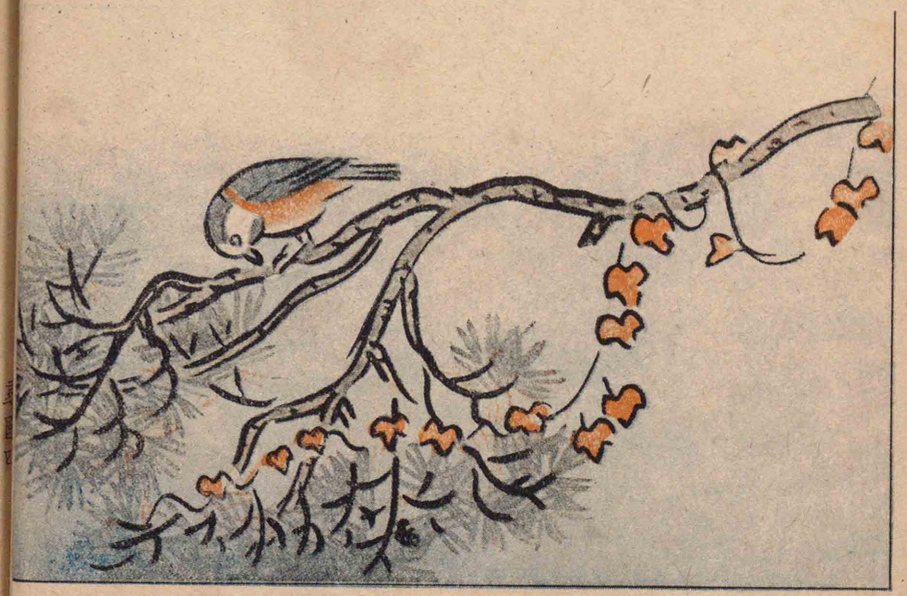
ニナリマシタ。サウシテ、ユデタ栗ヲ、オボンニ一パイ持ッテ來テ下サイマシタ。

ニハトリガ來テ、ムシロニホシテアルモミヲ、時々カキチラシマス。オバアサンガ、「ホウ、ホウ」ト イッテ オ追ヒニナリマスト、ニハトリヨリ先ニ、スゞメガ逃ゲテ行キマス。

「モウカヘリマス」。ト私ガイヒマスト、オバアサンハ、「ケフハ、コンナニモミガホシテアルカラ、ヲヂサンモ、ヲバサンモ早クカヘルヨ。モットアソンデオイデ」。トイッテ、オ止メニナリマシタ。シカシ、私ハ、オソクナルト思ッテ、イタゞイタ栗ヲ持ッテカヘリマシタ。

九　山がら

山　で　はた　おる
山がら　は、
けふ　も、朝　から、
とん〳〵　からり。
松　の　小枝　を



移　反

枝　から　枝　へ、
とんで　移って、
とん〳〵　からり。
朝　に　一反、
つゞいて　二反、
日　には　八反、
とん〳〵　からり。

羽

十　山がらの思出

私のうちに、山がらが一羽かってありました。大そうよくなれて、私の手からえをたべるほどになってゐました。

それが、かはいさうに、ある晩、ねずみに足の指をくひ切られました。

どんなにかないたのでせうが、うちのものは、朝まで知らずにゐました。

きずを見てやらうと思って、私がかごの戸をあけますと、山がらはとび出して、竹がきの上に止って、それから、うらの山へとんで行ってしまひました。

聲

これは、私が七つの年のことでした。今でも、山からの聲を聞くと、まだあれが生きてゐるだらうか、足のきずはどうしたらうかと思はないことはありません。

生

十一　大江山

江

大江山に、しゅてんどうじといふ鬼が

鬼

ゐて、時々都に出て来ては、物をぬすんだり、女や子どもをさらったりしました。

都は大さわぎです。

子

天子様は、大そうごしんぱいになって、

頼光（らいくわう）といふえらい大しゃうに、しゅてんどうじをたいぢるやうにおいひつけになりました。そこで、頼光は、五人

木生　畫　谷

の　強い　けらい　を　つれ、山伏（やまぶし）の　すが〃
た　を　して　出かけました。
大江山　に　來て　見る　と、鬼　の　住む
所　だけ　あって、大木　が　こんもり　と　生〃
ひしげり、畫　でも　うすぐらくて、ほんたう
に　ものすごい　山　でした。しかし、みんな
強い　人たち　ですから、びく　とも　せず、
けはしい　山道　を　上ったり、深い　谷　を

進　岩　待

渡ったり　して、だん〳〵　おく　へ　進んで
行きました。
しばらく　行く　と、大きな　岩　が　あって、
その　そば　に、一人　の　おぢいさん　が
立って　ゐました。さうして、
「あなた　は、賴光様　では　ありませんか。
私　は、けふ　あなた　が　こゝ　に　おい〃
で　に　なる　と　聞いて、お待ち　して

酒弱

喜

ゐたのです。この酒は、鬼がのめば弱くなり、人間がのめば強くなる、ふしぎな酒です。これを持って行って、鬼をたいぢて下さい。」

といって、一つのつぼを渡しました。

頼光は喜んで、そのつぼを受取りました。

もっと進んで行きますと、今度は、谷川

で、一人の若い女が、しくしくと泣きながら、せんたくをしてゐました。頼光がふしぎに思って、

「なぜ泣いてゐますか。」

尋　殺

と尋ねますと、女は、

「私は都のものですが、鬼にさらはれて、こゝに來ました。いつ殺されるかわかりません。それがかなしくて、泣いてゐるのです。」

といひました。頼光は、

「私は、天子様のおほせを受けて、その鬼をたいぢに來ました。鬼

のゐる所はどこですか。あんないして下さい。」

といひますと、女は、大そう喜んで、

「まあ、何といふありがたいことでせう。どうぞ、鬼をうち取って、私たちをお助け下さい。」

といって、先に立って道あんないをしました。

鐵番

やがて、向かふに大きな鐵の門が見えました。そのそばに、鬼の番兵が、鐵のぼうを持って立ってゐました。頼光は、そこへ行って、

「私たちは山伏ですが、道にまよって困ってゐます。どうぞ、一晩おとめ下さい。」

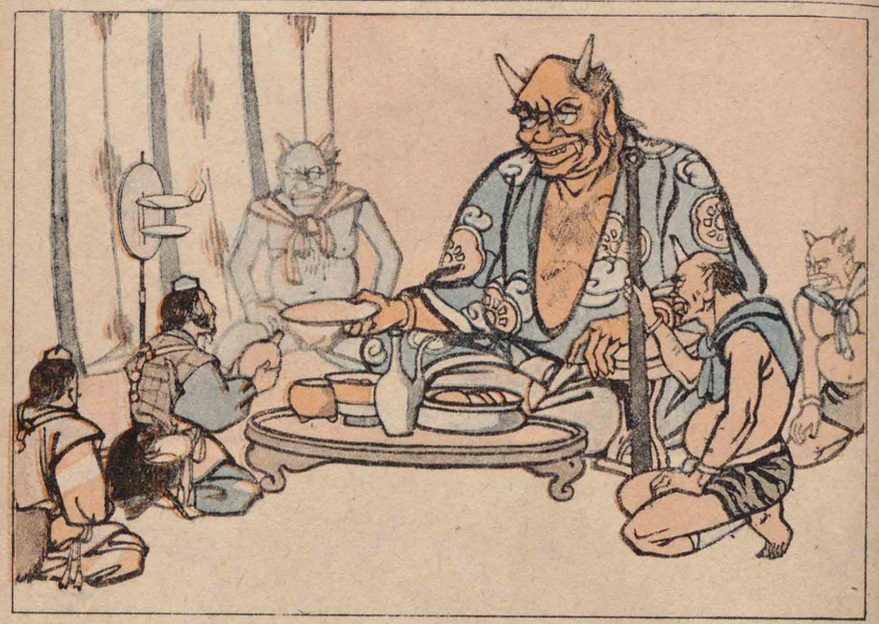
といひました。

鬼の番兵は、一度おくへはいりましたが、また出て來て、頼光たちを、しゅてんどうじのゐるりっぱなごてんへつれて行きました。

しゅてんどうじは、けらいの鬼どもを大ぜい集めて、酒もりをしてゐました。

頼光たちがはいって來るのを見ると、大きな目をむいて、ぎょろりと

にらみましたが、
「山伏たち、とめてあげよう。ゆっくり休むがよい。」
といひました。頼光は、
「ありがたうございます。私どもは、毎日、野や山にばかりねてゐましたが、今夜は、おかげでゆっくり休まれます。ちゃうどお酒もりのさいちゅう



のやうですが、私もよい酒を持ってゐます。一つめしあがって下さい。」
といって、おぢいさんからもらった酒を取出しました。

外

しゅてんどうじ は、一口 のんで みる と、これ まで のんだ ことも ない やうな、おいしい 酒 ですから、

「これ は うまい。これ は よい 酒 だ。」

と いって、がぶ〳〵 のみました。外 の 鬼ども も、次々 と たくさん のみました。そのうち に、ふしぎな 酒 の きゝめが あらはれて、しゅてんどうじ は、だん〳〵

元　身

元氣 が なく なり、しまひ には ぐったり と ねて しまひました。外 の 鬼ども も、あすこ へ 二ひき、こゝ へ 三びき と、ごろ〳〵 たふれて しまひました。

この やうす を 見た 頼光たち は、持って 來た よろひ や かぶと を 取出して、身じたく を しました。

頼光 は、しゅてんどうじ を 呼びおこし、刀

拔

を　拔いて、「えい。」と　一聲、その　首　を
切落しました。ところが、首　は　とび上って、
口　から　火　を　はきながら、頼光　の　あ
たま　に　かみつかう　と　しました。けれど
も、頼光　の　いきほひ　に　おそれて、その
ま、　落ちて　しまひました。
この　さわぎ　に、外　の　鬼ども　が　目　を
さまして、向かって　來ました　が、頼光たち

六人　に、みんな　殺さ
れて　しまひました。
そこで、頼光　は、しゅ
てんどうじ　の　大きな
首　を　けらい　に　か
つがせ、さらはれて　來
た　女　や　子どもたち
を　つれて、めでたく　都　へ　かへりました。

十二　鬼ごっこ

じゃんけんぽん　よ、
あひこ　でしょ。
鬼が　きまって、ばらくと
かけ出し、逃出し、逃げまはり、
左へ、右へ、逃げじゃうず。

うっかり　するな、
ゆだんを　するな。
鬼は　手早だ、足早だ。
すぐ　ねらはれて、つかまるぞ。
それく　逃げろ、それ　逃げろ。

鬼さん、ほんとに
追っかけじゃうず。

文　横後

ま一文字に、追ひかけて、
急に横向、後向、
つかまへじゃうず、追ひじゃうず。

つかれたものや
弱ったものは、
目にかけないぞ、追はないぞ。
元氣のよいもの、早いもの、

弟

左へ、右へ、それ逃げろ。

十三　いうびん

今までは ねをついて ゐた 花子さん
と 雪子さんは、今度は、いうびんごっこ
をすることにしました。
花子さんは、弟の三ちゃんを呼んで
來ました。三ちゃんは喜んで、青い紙を

小さく　切って、切手　を
こしらへました。雪子さ〃
ん　は、はがき　と　ふ〃
うとう　を　こしらへま〃
した。花子さん　は、お〃
かあさん　から　大きな
紙　の　箱　を　いただ〃
いて　來て、ポスト　を

こしらへました。
それから、花子さん　と　雪子さん　は、えん〃
がは　で、兩方　に　分れて　すわりました。
三ちゃん　は、まん中　に　ポスト　を　おいて、
その　そば　に　すわりました。
花子さん　と　雪子さん　は、だまって　何か
書始めました。その　間　に、三ちゃん　は、か〃
ばん　を　取り　に　行きました。

枚

三ちゃんがもとの所へかへって來ますと、ポストの中には、もう二枚のはがきがはいってゐました。三ちゃんは、それをかばんに入れて、はいたつに出ました。

「いうびん。」

一枚を花子さんに渡しました。

「いうびん。」

新

一枚を雪子さんに渡しました。

花子さんは、にこ〳〵して讀みました。

「新年おめでたうございます。」

雪子さんも、受取ったはがきを讀んでみますと、やっぱり、

「新年おめでたうございます。」

と書いてありました。

「あら、おんなじですね。」

と　いって、二人　とも　笑ひました。

三ちゃん　が、大きな　聲　で、

「もう　ありません　か。あったら、早く　出して　下さい。」

と　いひました。

花子さん　は、

「今度　は、私　が　先　に　書きます　から、雪子さん、ごへんじ　を　下さい。」

と　いって、手紙　を　書きました。さうして、三ちゃん　の　所　へ　持って　行って、

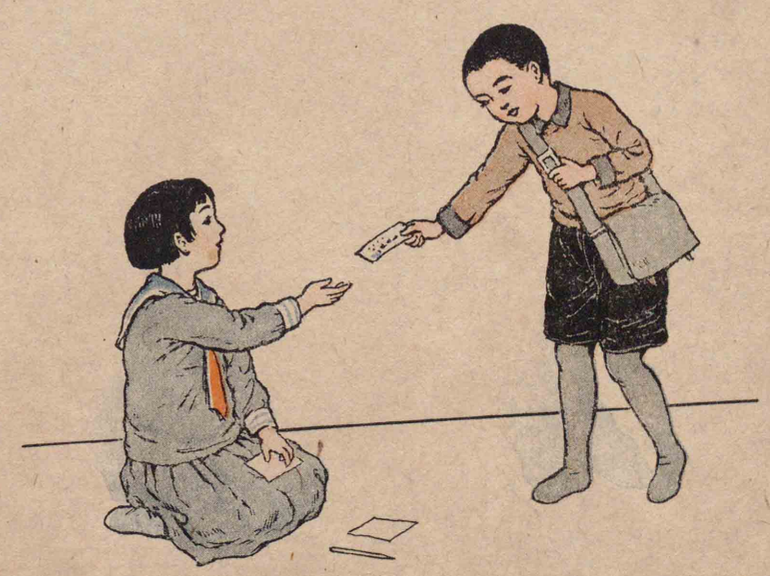
「四錢　の　切手　を　一枚　下さい。」

と　いひました。

三ちゃん　が　切手　を　渡します　と、花子さん　は、それ　を　はって、ポスト　へ　入れました。

三ちゃん　は、その　手紙　を　雪子さん　の

所へ持って行って、
「いうびん。」
といって、渡しました。
雪子さんがあけて見ますと、
「あしたから、學校が始りますが、また一しょに行きます。



せう。朝さそって下さい。」
と書いてありました。
雪子さんは、
「お手紙ありがたうございます。きっとおさそひしますから、三ちゃんと一しょに待ってゐて下さい。」
と書いて、切手をはってポストへ入れました。

十四　ニイサン　ノ　入營

ケフ　ハ、ニイサン　ガ　入營　スル　日　デ
ス。

ニイサン　ハ、青年學校　ノ　服　ニ　着カ
ヘマシタ。ソバ　デ、オカアサン　ガ、何　カ
忘レタ　物　ハ　ナイ　カ　ト、イロ〳〵　セ
ワヲ　シテ　イラッシャイマス。ソコヘ、オ

トウサン　ガ　ハイッテ　來テ、
「シタク　ハ　出來タ　カ。」
ト　オッシャル　ト、
「ハイ、スッカリ　出來マシタ。」
ト、ニイサン　ガ　答ヘマシタ。
オザシキ　ノ　方　デハ、シンル牛　ヤ　近所
ノ　人　ガ　集ッテ、ニギヤカ　ニ　話　ヲ　シ
テ　ヰマス。

氏　村長　人

八時　ガ　ナッタ　ノデ、ミンナ　ソロッテ　出カケマシタ。氏神様　へ　オマヰリ　ヲ　シテ、ソレカラ　停車場（テイシャヂャウ）　へ　行キマシタ。

停車場　デハ、村長サン、校長先生、ザイガウ軍人、青年團（セイネンダン）、青年學校　ノ　人タチ　ガ、大ゼイ　集ッテ　ヰマシタ。ニイサン　ヲ　見ルト、

「オメデタウ。」

「オメデタウ。」

ト　イヒマシタ。

ニイサン　ハ　ニコ〳〵　シテ、ミンナ　ニ　オジギ　ヲ　シマシタ。

間モナク、汽車　ガ　來マシタ。ニイサン　ハ、元氣

乘

ナ　聲　デ、

「デハ、行ッテ　マヰリマス。」

ト　アイサツ　ヲ　シテ、汽車　ニ　乘リマシタ。

私　ガ、大キナ　聲　デ、

「ニイサン、ゴキゲン　ヨウ。」

ト　イフ　ト、オトウサン　モ　ツヾイテ、

「シッカリ　ヤッテ　來イ　ヨ。」

ト　オッシャイマシタ。

汽車　ハ、シヅカ　ニ　動キ出シマシタ。

「バンザイ。バンザイ。」

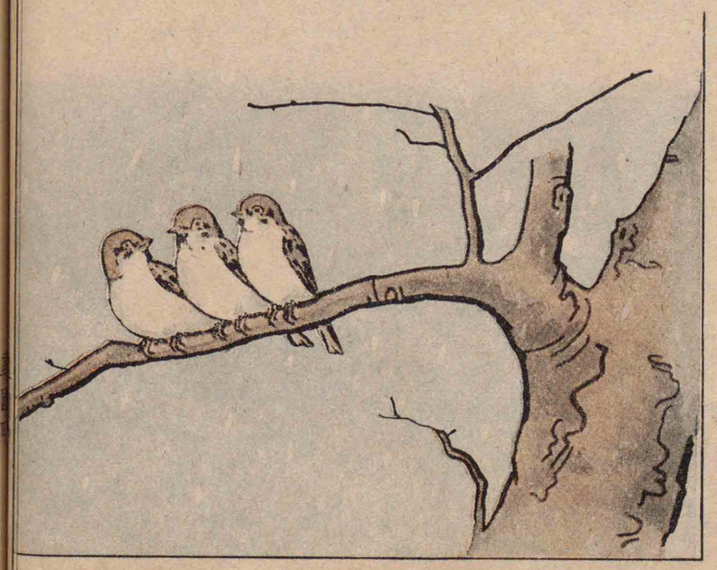
ミシナ　ハ、ムチュウ　ニ　ナッテ　サケビマシタ。

ニイサン　ハ、汽車　ノ　マド　カラ、カホヲ　出シテ、何ベン　モ　バウシ　ヲ　フリマシタ。

十五　すゞめ

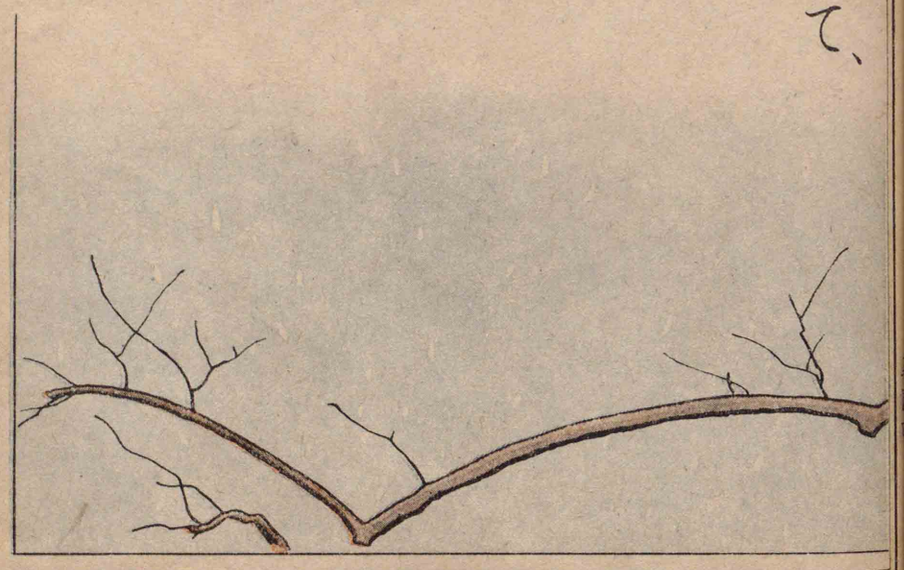
木の枝に
すゞめが三羽。
雪がちらく
降ってゐる。

ぴったりと



からだをつけ合って、
並んだすゞめ、
三羽のすゞめ。

お前のうちは
どこにある。
早くおかへり、
日がくれる。



兎　島　陸　仲　多

十六　白兎

島にゐた白兎が、向かふの陸へ行ってみたいと思ひました。

ある日、はまべへ出て見ると、わにざめがゐましたので、

「君の仲間と、ぼくの仲間と、どっちが多いか、くらべてみよう。」

連　背

といひました。わにざめは、

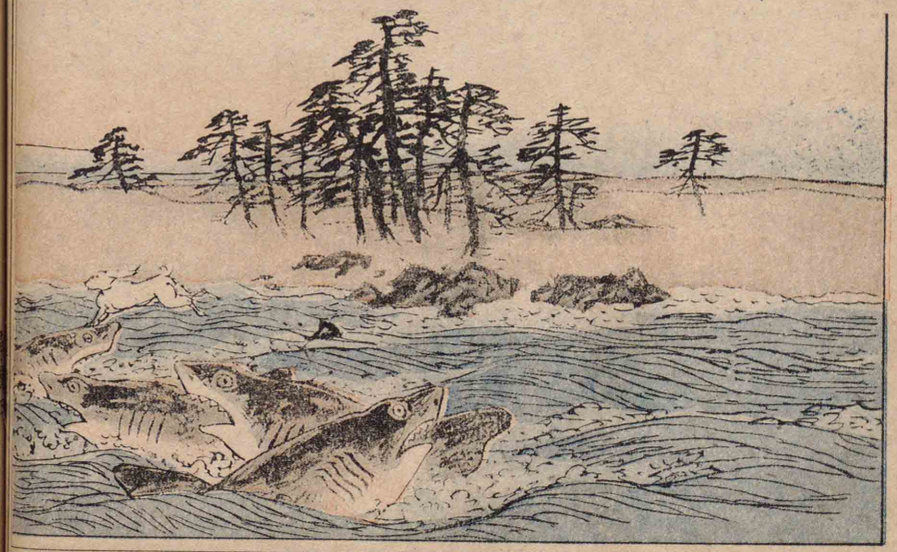
「それはおもしろからう。」

といって、すぐに、仲間を大ぜい連れて来ました。

白兎は、それを見て、

「なるほど、君の仲間はずゐぶん多いな。これでは、ぼくらの方が負けるかも知れない。君らの背中

の　上　を　歩いて、
かぞへて　みる　から、
向かふ　の　陸　まで
並んで　みたまへ。」
と　いひました。
わにざめ　は、白兎　の
いふ　通り　に　並びま
した。白兎　は、「一つ、



二つ、三つ、四つ。」と　か
ぞへて　渡って　行きま
した。
たが、もう　一足　で
陸　へ　上らう　と　い
ふ　所　で、
「君ら　は、うまく　だ
まされた　な。ぼく　は、ここ　へ　渡って
來たかった　のだ。あはこ。」

毛　痛

といって　笑ひました。

わにざめ　は、それ　を　聞く　と　大そう　おこりました。一番　しまひ　に　ゐたわ　にざめ　が、白兎　を　つかまへて、からだ　の　毛　を　みんな　むしり取って　しまひました。

白兎　は、痛くて　たまりません　から、はまべに　立って　泣いて　ゐました。その　時、

大ぜい　の　神様　が　お通り　に　なって、

「お前、なぜ　泣いて　ゐる　の　か。」

と　お尋ね　に　なりました。白兎　が、今　まで　の　こと　を　申します　と、神様　は、

「それなら、海　の　水　を　あびて、ねて　ゐる　が　よい。」

と　おっしゃいました。

白兎　は、すぐ　海　の　水　を　あびました。

主　　兄重

すると、痛み が 一そう ひどく なって、どう にも たまらな く なりました。そこ へ、大國主のみこと と いふ 神様が おいで に なりました。この 方 は、さきほど お通り に なった 神様方 の 弟さん です。兄様方 の 重い ふくろ を かついで いらっしゃった ので、おそ く おなり に なった の です。

この 大國主のみこと も、「お前、なぜ 泣いて みる の か。」と お尋ね に なりました。白兎 は、泣きながら、また 今 までの こと を 申しました。大國主のみこと は、「かはいさう に。早く 川 の 水 で か

らだを洗って、がまのほをしいて、その上にころがるがよい。」

とおっしゃいました。

白兎がその通りにしますと、からだは、すぐもとのやうになりました。喜んで大國主のみことに、

「おかげさまで、すっかりなほりました。あなたは、おなさけ深いお方ですから、

後には、きっとえらいお方におなりでせう。」

と申しました。

白兎のいった通り、大國主のみことは、その後、えらいお方におなりになりました。

十七　豆まき

節分　今年　供

けふ　は　節分　で、豆まき　の　日　です。

「今年　から　お前　まけ。」と、おとうさん　が　おっしゃった　ので、ぼく　は　うれしくて　たまりません。

おかあさん　は、豆　を　たくさん　いって、まだ　すに　入れ、神だな　に　お供へ　に　なりました。ぼく　は、早く　晩　に　なれば　よいと　思ひました。

だん〳〵　うすぐらく　なる　と、あちら　でも、こちら　でも、豆まき　の　聲　が　聞えます。おとうさん　が、

「良雄、うち　でも　そろく　始める　かね。」

と　おっしゃって、神だな　から　ます　を　下して　下さいました。

ぼく　は、少し　はづかしかった　が、思ひ切っ

福内　妹　後

て、

「福は内、鬼は外。」

と聲をはり上げて、豆をまきました。

方々のへやをまいて歩くと、妹や弟が、後からついて來て、「きゃっ、きゃっ。」と、

拾

大さわぎをして豆を拾ひました。

ぼくも、おもしろくなって、だんだん大きな聲を出しながら、豆をまきました。そのうちに、うっかりして、「鬼は内、福は外。」といったの

で、みんながどっと笑ひました。
しまひに、えんがはに出て、「鬼は外、
鬼は外。」といひながら、豆を庭に
向かってゐせいよくまきますと、おかあ
さんが、雨戸をぴしゃりとおしめに
なりました。
それから、みんなで、豆を年のかず
だけたべました。おかあさんは、

「これで、ほんたうに一つ年を取っ
たのですよ。これからもっと勉
強しなければいけません。」
とおっしゃいました。

十八　百合若（ゆりわか）

昔、百合若といふ、弓のじゃうずな
大将がありました。

外國　攻　召　敵

ある年、外國の軍ぜいが、たくさんの舟に乗って、攻めよせて來ました。天子様は、百合若をお召しになって、

「早く行って、敵を追ひはらへ。」

とおっしゃいました。

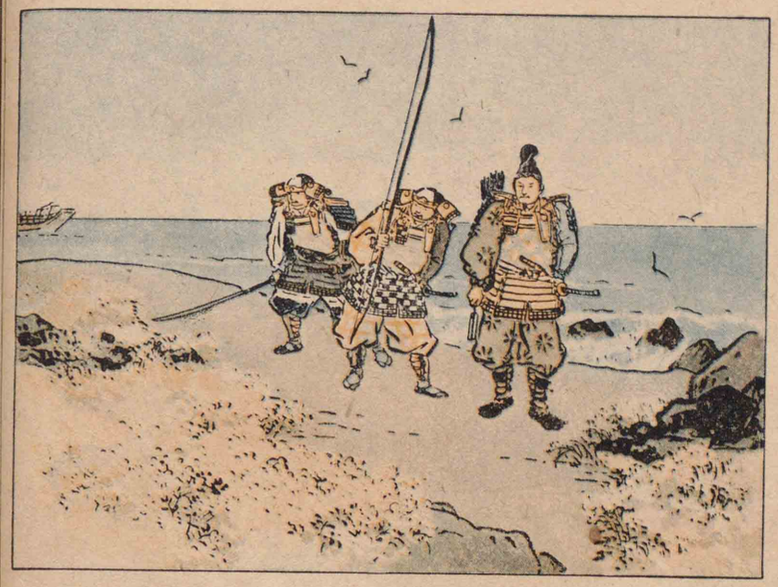
百合若は、大きな鐵の弓と鐵の矢を持ち、大ぜいのけらいを連れて出かけました。さうして、さかんに鐵

射　勝

の矢を射かけましたので、敵の舟は、次々にしづめられ、のこった舟は、ちりぢりになって逃出しました。そこで、百合若の軍ぜいは、舟を出して追ひかけ追ひかけ、とうとう、敵の舟をすっかり追ひはらってしまひました。

かうして、勝ちに勝った百合若の軍ぜいは、もとのはまべへひきかへす

ことになりました。



ところが、かへると、ちゅうに、きれいな島がありました。百合若は、けらいの雲太郎雨太郎といふきゃうだいのものを連れて、その島へ上つてみました。

た。そこには、美しい草が一めんに生え、かはいらしい鳥がおもしろく歌つてゐました。

「あゝ、よい所だ。しばらくこゝで休むことにしよう。」

といって、百合若は、ごろりと草の上にねころびました。

長い間のつかれが出たとみえて、

百合若は、いつの間にか、ぐっすりねこんでしまひました。さうして、三日三晩たっても、まだ目が　さめません　でした。

このやうすを見て、雲太郎きゃうだいは、ふと　わるい　心を　おこし、百合若を島に　おきざりにして、自分たちが大将に　ならうと　かんがへました。二人は　舟へ　かへって、

「大将は、矢のきずが　もとで、とうとう、この島で　おなくなりになった。」

と　いひふらしました。

雲太郎きゃうだいは、百合若の軍ぜいをひきゐて　かへりました。さうして、天子様に、

城

「百合若は　うち死をいたしましたから、私たち　きゃうだいの力で、敵をすっかり　追ひはらって　まゐりました。」

と　申し上げました。

きゃうだいは、思ひ通り　大將となり、これまで　百合若の　ゐた、りっぱな　城に　住んで、いばって　ゐました。

その　後、何年かたって　からの　こと

流　　珍

です。なんせんして、鬼が島へ　流れついたれふしが、鬼を　一ぴき　連れて　かへって　來たといふうはさが　つたはりました。これを　聞いた　雲太郎きゃうだいは、

「それは　珍しい　ものだ。すぐ　連れて　來い。」

と、けらいに　いひつけました。

連れられて　來たのを　見ると、かみも、ひげも　ぼう〳〵　とのび、かほも、手足も　あかに　うづまって、まるで、こけが　生えた　やうな　男　でした。

「なるほど、鬼　の　やう　でも　あり、人の　やう　でも　ある。都　へ　連れて　行ったら、人　が　珍しがって　見る　だらう。」

と　いって、雲太郎きゃうだい　は、その　男

に「こけ丸」と　いふ　名　を　つけ、しばらく　家　に　おく　こと　に　しました。

そのうち　に　年　が　かはって、お正月　に　なりました。雲太郎　雨太郎　は、けらい　を　集めて　弓　の　會　を　開きました。

雲太郎　が　弓　を　射よう　と　する　時、

「あは、、、何　だ、あんな　弓　しか　引け　ない　の　か。」

平

と、大きな聲で笑ふものがありました。見ると、それはこけ丸でした。

雲太郎は、おこっていひました。

「何だ、こけ丸。もう一度いってみろ。」

こけ丸は、平氣なかほで、

「そんな弓は、赤んばうでも引けませう。はゝゝ。」

と、また笑ひました。

生　折

「何を生いきな。それなら、これを引いてみろ。」

といって、雲太郎は、一番強い弓を渡しました。

こけ丸は、すぐそれを折ってしまひました。雲太郎はくやしがって、昔百合若が使った鐵の弓矢を持出させました。

さうして、

「これを引いてみろ。百合若様の弓矢だ。引けなかったら、命がないぞ。」

といひました。

こけ丸は、にっこり笑ってその弓を取上げ、鐵の矢をつがへて、満月のやうに引きしぼりました。急に、矢先をきゃうだいの方へ向けて、

「見忘れたか。われこそ、その百合若だ。かくごしろ。」

といひました。

二人は、おどろいて逃出しましたが、すぐに射殺されてしまひました。

十九　ひなまつり

まっかな　まうせん、ひの　まうせん、
金のびゃうぶに、だいり様、

官女　桃　友

五人ばやしや　官女たち。
かはい、　ぼんぼり、桃の　花、
あられ　ひしもち　お白酒、
供へて　けふの　ひなまつり。
友だち　呼んで、にぎやかに、
お話　したり、歌ったり。

北南　冬寒

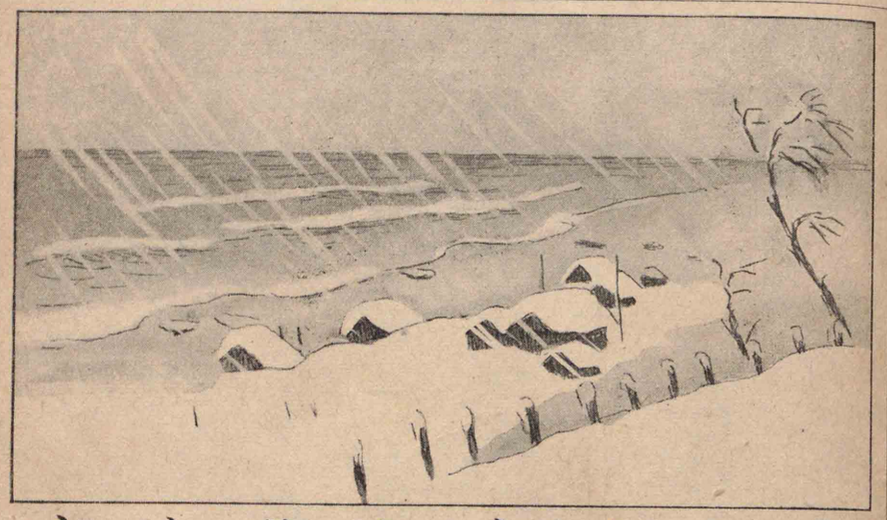
おひな様もうれしさう。

二十 北風ト南風

北風ト南風ハ、大ソウ仲ガワルイヤウデス。

冬ノ間ハ、寒イ北風ガビュウビュウト吹キマハリマス。サウシテ、雪ヤアラレヲ降ラセタリ、水ヲコホラセタリ

暖　氷



シマス。シカシ、北風ガ少シユダンヲシテヰルト、暖イ南風ガソットヤッテ來マス。サウシテ、北風ノ作ッタ雪ノ山ヤ氷ノ池ヲ、少シデモトカサウト

シマス。スルト、北風ハスグ南風ヲ追ヒハラヒマス。

コンナコトヲ何ベンモクリカヘシテ
ヰル ウチニ、冬ガ終ニ近ヅイテ
來マス。サウシテ、今マデハ、半分眠ッテ
デモヰルヤウニ、弱イ光ヲ出シテ
ヰタオ日様ガ、ダン〳〵暖イ光
ヲ送ルヤウニナリマス。

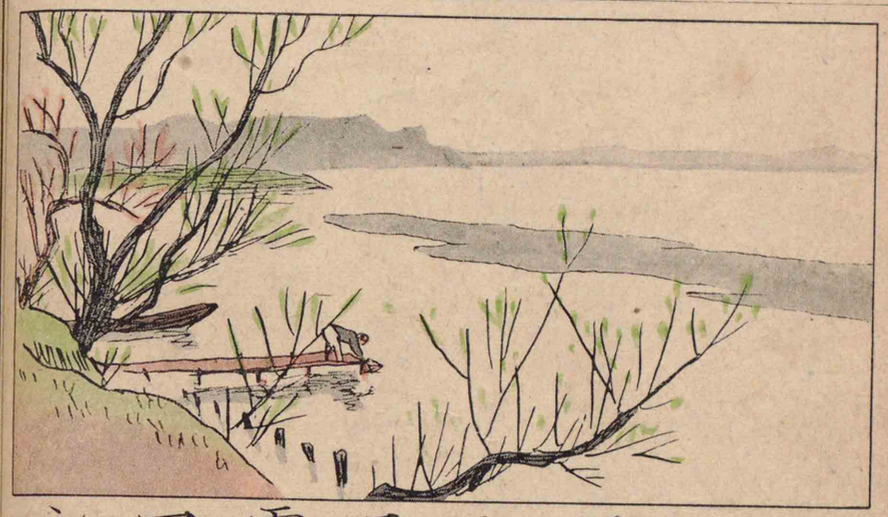
終　半眠　送

カウナッテ來ルト、南風ハ、モウ前ノヤウニ負ケテバカリハヰマセン。

「北風、オ前ハモウ北ノ國ヘカヘッテシマヘ。」

ト、南風ガイヒマス。スルト、北風ハ、

「ナアニ、マダオ前ノ出テ來ル時デハナイ。ワタシハ、モウ一度オ前ヲ追ヒハラッテ、野ヤ山ヲマッ白



ニ シテ ヤル」。

ト 答ヘマス。サウシテ、アリッタケノ カヲ 出シテ、南風 ヲ 追立テマス。野 ヤ 山 ガ、マタ 雪 デ マッ白 ニ ナリマス。

シカシ、南風 ハ スグ

霜　芽

ニ 元氣 ヲ モリカヘシマス。サウシテ、南ノ 國 カラ 大ゼイノ 仲間 ヲ 連レテ來テ、北風 ヲ ドシ〳〵 ト 追ヒマクリマス。雪 デモ、霜 デモ、氷 デモ、カタハシカラ トカシテ、野 ヤ 山 ヲ 暖ク シマス。暖イ 雨 ヲ 何ベン カ 降ラセマス。スルト、草 ヤ 木 ガ ダン〳〵 ト 芽ヲ フキ、花 ノ ツボミ ガ フクランデ

衣

來マス。

南風ハ　イヒマス。

「北風ガ、霜ヤ雪デ、野山ヲマッシロニシタカハリニ、ワタシハ、赤イ花ヤミドリノ若草デ、野山ヲカザッテ見セヨウ」。

二十一　羽衣

原　寄　返

白い　はまべの
松原　に、
波　が　寄せたり、
返したり。

かもめ　すいすい
とんで　行く、
空　に　かすんだ

富士の山。

一人のれふしが、三保の松原へ出て來ました。

れふし「あゝ、よい　お天氣だ。さうして、まあ、何といふよい　けしきだらう。」

けしきに見とれながら歩いてゐますと、どこから　か、よい　にほひがして來ました。ふと見ると、向かふの松の枝に、何かきれいな物がかゝつてゐます。

れふし「おや、あれは何だらうな。」

れふしは、そばへ寄って、よく見ました。

れふし「着物だ。こんなきれいな着物は、まだ見たことがない。持ってかへつて、うちのたから物にしよう。」

れふしは、その着物を取って、持って行かうとしました。すると、その松の木の後から、一人の女が出て來ました。

女「もし、それは私の着物でございます。どうしてお持ちになるのですか。」

れふし「いや、これはわたしが拾ったのです。持ってかへって、うちのたから物にしようと思ひます。」

女「それは、天人の羽衣で、あなた方には、ご用のない物でございます。どうぞ、お返し下さいませ。」

れふし「天人の羽衣なら、なほさらお返しは出來ません。日本のたから物にします。」

悲

天人「それ　が　ない　と、私　は　天　へ　か
へる　こと　が　出來ません。どうぞ、お返
し　下さいませ。」
れふし「いや、いけません。返されません。」
れふし　は、どうして　も　返しません。天
人　は、悲しさうな　かほ　を　して、じっと
空　を　見上げました。
天人　の　しをれた　やうす　を　見て、れふ

代

し　も　きのどく　に　思ひました。
れふし「あんまり　おきのどく　です　から、羽衣
を　お返し　いたしませう。」
天人「それ　は　ありがたう　ございます。では、
こちら　へ　いただきませう。」
れふし「お待ち　下さい。その　代り　に、天人
の　まひ　を　まって　見せて　下さいません
か。」

天人「おかげで天へかへられます。おれいにまひをいたしませう。でも、その羽衣がないと、まふことが出來ません。」

れふし「どいって、羽衣をお返ししたら、あなたは、まはずにかへっておしまひになるでせう。」

天人「いゝえ、天人はけっしてうそを申しません。」

れふし「あゝ、はづかしいことを申しました。」

れふしは羽衣を返しました。天人は、それを着て、しづかにまひ始めました。

天人「月の都の天人たちが、黒い衣のそろひでまふと、

月は　まっ黒、
やみの　夜。

月の　都の
天人たちが、
白い　衣の
そろひで
まふと、

月は　十五夜、
まん圓い。

天人は、まひながら
だんだん　天へ　上って
行きました。
右に、左に
ひらひらと、
動く　たもとの

美しさ。

白い はまべ の
松原 に、
波 が 寄せたり、
返したり。

いつ の 間 に やら

天人 は、
春 の かすみ に
包まれて。

かもめ すいく
とんで 行く、
空 に ほんのり
富士 の 山。

着物烏昔枝波麥豆困軍畠黑勇字書讀加賀
旗並負笑女娘世申晩都界兵追弓矢腹親圓
樣始足包渡栗逃移反聲江鬼晝谷進岩待酒
弱喜尋殺鐵番休野元身拔文横後弟兩分枚
新錢營服氏汽乘降兎島陸仲多連背毛痛主
兄重節供福内妹拾勉將攻召敵射勝歌心城
流珍丸會開引平折命滿官桃友北南冬寒暖
氷終半眠送霜芽衣原寄返富士悲代

終

昭和十三年五月十一日修正印刷
昭和十三年五月十三日修正發行
昭和十三年五月十三日翻刻印刷
昭和十三年六月十三日翻刻發行

小學國語讀本卷四尋常科用
定價金拾四錢

著作兼發行者　文部省

著作權所有

昭和十三年五月十四日
文部省檢査濟

發行所　東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社

印刷所　東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社工場

翻刻發行兼印刷者　東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社
代表者　石川正作

柳井智臣